

能く雪の解けた、春。

相倉の朝は朗らかだった。囲う山々の澄み切った神秘は発露され、霞のような桜は惜しげなく花やいだ。天を仰ぐ赤子の手指のような筑紫は、その頭を軽やかにつきだしていた。春風のたちこむ、美しい村である。

五箇山の迫った合掌の縁側で十四五の少女は緑を目の当たりにしながら、どこか落着かない容子である。轉るように山を見上げ、地を跳ぶようにつま先を上下している。新緑にその姿が際立つ。この村には未だ働かない小鳥が何羽も。

少年が家を背にしたのは日の暮れる間際だろうか。かつ、かつ、かつ、と心地よい音で石畳を休まず叩き、畦に出る。特にいそぐ様子である。どうやら、予定に遅れたようだ。

今朝、病床に臥した母の看病をしたからである。戦争で父親を亡くしてから、その家に暮らすのは母子のみである。二人では到底埋戻す事も出来ない素戔とした座敷の中、互いを温かに色づけ合う。その寡婦の為の息子であり、その息子の為の寡婦である。なんと簡勁で晴れやかなつながりだろう。

少年がその家に着いたのは暫くあとの事である。まず、家の中を見渡す。居ない。次いで、家のぐるりを暗いほう、暗いほうへ、と廻った。縁側に座っている、筈であった。

果たして、少女はそこに居なかった。彼はがつくりと肩を落して、窄めた蝙蝠傘のようになつた。彼女はもう行ってしまった。もし、彼がその

姿を見受ける事が出来たのなら、少女の優越でもある眦が美しい変化を経て、一所に……彼の目に。優しき少年は母を恨んだ。

彼は少年らしからぬ重い足取りで畦を辿った。微かな雪がまみえる田園で、畦はうら淋しげであった。世の少年の秘め事のすべてを祝福するかのような情熱の夕日が、水面にうつり、稲の陰翳とその姿を讃えあう。彼は顔を太陽に向けた。不意に彼は、自身の情事の全てを忘れた。そうして、足取りが軽くなるのを感じた。誘われるように歩みを続けた。

道に佇む少女がひとり。可愛らしい桃色の無地に秋まつた黄色の文庫、髪には幼くひらいた蝶が一羽。紅に富んだ花が燃えるように咲く梅の木は、美しくもいかめしい合掌を飾りつける。花は彼女の頬でも燃えている。

翳りを含んだその眦がもちあがり、目睹するのは放熱の赤円——夕日である。退屈そうな顔を太陽からそむけた。少女にとつてそれは日常以外の何物でも無い。畢竟少年は訪れなかった。忘れられたのかもしれない。しかし、彼女の眦が静かにそれを否定した。

闇を纏った少年は或る鳥居の手前に止まった。情事は再び彼に触れていた。何やらにぎやかだが、奥まった所から聞こえてくる。膝下にだらりと目を遣り、土を踏む、躰を前に渡す。

踏む。渡す。踏む。渡す。地がひらける。すると、突如明かりがまみえる。山をも照らすような明かりである。

その夜、地主神社では夜獅子が行われていた。

囃子と提灯を群衆にした舞台では、獅子と天狗がその涼やかな体軀を踊り震わせた。黒漆の獅子がぐるりの提灯の灯を妖しくふりまいていた。眉に流れる金の瑞雲が、彼の眼を刺した。忽ち熱が彼を蝕んだ。囃子が彼の耳をとおのいてゆく。心のうつが去りゆくなか、意中には少女と夕日の姿があった。厭世とは疎になつた彼は、酩酊した眼で世を思う。

生前の父を愛した。病床の母を愛した。

一刻も早く家に帰ってやらねばと思った。母の為に、父の為に。

覚束ない足は、しだいに鳥居へ向けられる。安らいだ彼の心はひとつの不足もないように思えた。彼の顔は二度も地に照らされてはいなかった。面を上げていたのだ。そうして向いた先には、

鳥居の赤と、無地の桃。二人の眼が合った。少年の弁明は少女の微笑に消えた。少女は待ち侘びていたことなどもう忘れていた。眦を幼なく此方へ向けた。光を湛えたその眼に永遠をみた。少年はひどくいじらしく思った。熱はしばらく止みそうにない。

夕日が彼らを照らしている事を少年だけが知っていた。

